

〔解説〕 子どもたちの学びを核とした地域のつながり

「通学合宿」をテーマとすると、その発祥の地である飯塚市庄内での取り組みは、ほぼ必ず参考や比較の対象としてあげられるほどに代表的なものである。ここでの実践は、数々の市区町村から参考とされ、また参加者である子どもの学びについてこれまでに多くの調査と研究がなされてきた。通学合宿中での子どもたちの学びに目を向けることは言うまでもなく重要なことであるが、地域実習として現場を見る学生にはさらに「どんな要素がこの事業を可能にしているのか」といった背景に着目することが求められる。どのように環境が整えられ、どのような人が関わっていて、この事業を30年以上にわたるものにしているのか、現場の中で体験とともに考えられなければならない。

まず環境からの視点として、生活体験学校が通学合宿専用の施設として存在していることは特徴的な点であるといえる。合宿を行うには宿泊可能な施設・設備が整った環境を用意することが実施の前提条件としてあるため、この環境を確保できないことを理由に通学合宿の実施がかなわない地域も存在していることは、理解しておく必要がある。他の市町村では通学合宿を行う際、生活の場として設定されるのは公民館や青少年教育施設であることが多い。庄内の生活体験学校はキャンプ場から発展した通学合宿専用の施設であるため、通年で連続的な実施回数を可能としているといえるだろう。

またそのような環境の維持や事業の運営にあたり、どのような人が関わっているのかを知ること重要である。現場で子どもの指導やサポートをする職員やボランティアなどの主催者・協力者の人材確保は、通学合宿実施の大きな課題としてあげられる。庄内町が2006年に飯塚市と合併となった際、対象となる子どもたちが変化するとともに、運営する町の職員配置にも変革を余儀なくされた。現在はNPO法人体験教育研究会ドングリによって、通学合宿及び

生活体験事業のための正規職員が存在していることは、専門的な知識を担保し継続的な提供を可能としていると考えられる。加えてOBOG会によるボランティア団体が存在していることは興味深く、活動が数十年にわたり継続されたことによって実現できる、庄内の特徴的な人材といえるだろう。

むしろ、通学合宿の現場の外に存在する協力者についても検討する必要がある。参加者募集を考えたとき、学校を通じて行われることは想像に難くない。また家庭では保護者の同意を得られなければ、参加するまでに至れない。そのために、学校と保護者との通学合宿に関する理解と協力は事業の運営に必須であるといえる。

また運営においては野菜づくりや動物の飼育などの活動に当たり、各分野の専門家から知識を得ることは、地域の人間との交流が生まれる機会にもなる。原氏からも説明があったように、現在は生活体験学校の方が保育者や教育者へ必要な知識を提供し、大人の教育施設としての役割も果たしているといえるだろう。

子どもの、かつて家庭の労働力として存在する中で培われてきた能力は、現代では自主的な体験によって育まれることが期待されている。通学合宿はこの生活体験による教育的意義をもった事例であるとともに、子どもを中心として、現場指導をする職員やボランティア、保護者、学校とその教員との間で交流が生まれ、地域でのつながりを醸成するプログラムとしてみることができるだろう。

庄内での実習を終える前と後とで、学生は自身の近くにいる子どもやその保護者、その周囲の大人たちへのまなざしに変化が現れるだろうか。まずは意識し関心を持つことが、その地域でのつながりを育む一歩となると学ぶことに期待したい。

(塩月 真布由)